遺老物語

三河之物語

一 大久保次左衛門物語に物おほえ候つきてよりは古来より此方三寸にむちうりといふ事一大事也馬は武者として乗り不自由やむちかうりハけるそあふりそ尻とおみえし先へりさかふは見えすやかんよき馬ともらくしけれとも一段と見若しく見ゆるやと語ゆき

一 同人物語に大高は兵粮入の時山口をうめて多勢へ打入るを見て同役案内に問ふ左馬が皆こと定て軍あらんといふ時杉浦ハに左軍もするぬ敵や心あるへき通りけれへと申し何とて軍すまぬ敵やと見えけると後に申されけれはへも軍せんをととして旗の陰に物し打立て居下山の頂をもへてりけるぬに諸方人数ありし山へ出る抱え

一　運すゐ敵やと申されき業ねこそ運なりけき
一同人物語に石川新九郎度々の手柄力為常や平生は
いふとかれらのや矢剣の退口の时粉灰ナふこゑ新九と
一度にのきて敵はるく追かける时すふこふ是又かくれ
なき切えなれも新九がんしやうて先立にゆきされ
时らはふとかけも返さす新九もりあひうろて乃ふ
にけ乃ひんと思ひてこちもとかけかへせとよはりける时新
九立向打かゝ横さまに取ちて打たれも返す敵も返せといふ
まれられもやましたらけにけるとて二人なからく又に
乃れ乎生の利根と返ひけるとて参られ由
一　いらふゆき候时敵後く追かけれと次左衛門さいはし返し合
もし合ひてのきれ其时なけりかさとて偏笠のもの

ろうら弦をて退けり敵おそりかけてもろら笠より
とては見まや名のりろへと云かけれと名はふさとし
名乗らす大井川を渡り向ひにて打ちる鉄炮を黒
田が見てらまつらて我より先まや必うちあてよ
とて渡しると重にしてうてとて川端よりつゞし
ふ義もろせ候敵川すゑへ五騎ばかりこし一れ先の敵と
川中へ寄候すれより敵つゝすしてのきてなれして内
藤ふ左兵衛次太は何とそ名ゑぬ名
家らふ敵まてれ手柄にてまへきとことにわり时ケ体の时
は名のらぬものや敵名字てよかりけてさりとては
見るやさんへよといふそれかる时みるとられ志んかりの
ろの一人うられを粉負よるものやと各同年比れ

衣よ宇しゆて多勢て尤と宇し候処　其時　家康様より
黒地之文字の鉄炮衆ゐ出し候と云れ　後迄　持申候
一又付候きの時大久保新七坂ゐと云まけあり　先て来ル
敵と三万計にて　鉄炮にて打たれしゆと　家康様
御覧候て　新七に迎て　鳥をうちぬに当りて　尤
めてうちうろ　御ふもち候へ　鳥打ときまゐぬ時は　尊鹿
とあるよ一条よ　乱て多く川あやと申てし　へ負候
一みぎり京原軍にて　夜けりし置あるは　敵来付　又ハ明り
も勝よ家ニんとて　大久保　七郎右衛門尊して　揚候家中のけ
鉄炮と集候へハ　原軍の　あがらく　鉄炮　立所あり
つるとめしつれ　さいがかけへまもり　信玄来陣ん
ミつうらせ候　敵すあ　驚(ヨドロキ)き明る　果て天にみうろ京と

川越して　家康の家中　猛者多しと見え候　敵か不申は
志されましきと　信玄感候と申す　とは申えて　一
類中　七左衛門と櫛るも覚と申候へも　名常源七郎
来しけり　一類中のもちに火ハかけぬか　風に火とか
けてと云申候と石申て　右伊勢守殿に立て笑申候由
一日時退口に　後追申候といふ也　討死しけり　小坂新助
のしとて　まをそて　ひけハ首さつりて　川へるそと　七郎右衛門
るれ上にて　見て見て　まとをそて　川をひられぬもの也　是を
まれて　ひけとしきれ候り　見候れて　まくりのけて　敵に
首をとられすと　新助つ通申候
一日時相撲るれて　のきゆと　名は云れ候　誰やらん新助に
草作討死仕候　後るふのせん　候れとの　あとのせ候ひつれむ

其時も左馬助殿衆ゟ知してらるゝ様へと申ハ殿衆
場所とゆき田れ時ふつきくしどゝど跪き居る
むみらき名々のこし段けると敵見つけて之候ハ
よしすれ由ゟ御沙汰之や

一 其左馬助殿ハ先之左馬助ハ小田原まて参
会ゟ申れ時未だ浄土宗は矢田作ふ波切ゟ殺
大原左近太郎公方とふハまつとわすれの度殺まて
まて申とて右衛門殿も申ハ付るき左衛門心をも通るゟ思へ
を思ふ者は様を手ゟ物と思へて申よき成や死する
よりいきゝゟ増しと思ひ身随ひまして見合ふ事
如何ゟやや卯き事と云無ひもとも武度も先候それ
人ハ是を人と常ふれ物ゟ御申されゟし

一 浄土宗の様ゟ浄家にて色々武者ゟ御役されし時右ハ
三人ゟ浄土ハ人物ある場は此頃ゟ有つると申候れ時
前よ覚は曾我殿様と存候場十二度の其れ右衛門殿ハ
ぬし一人の積文ハまし引まて大勢れ人ゟましけれ
とらしまてと場をうき 佐治郎時 杉浦ハ私ゟ左
左右衛 高橋ゟまて馬上まて験之様と存合つき
前し候ハ今時物語ゟされ候しられも十二度ゟ由緒
弱处ハいやしく候の少のゝは武度とみつけ
狩ふ申されゟぬとを申候由

一 城際の軍左せぬものゟやと芳かふいひ候ゟ城にて候
右城にて城際れ軍して深け入ふ事りぬと沙汰申候之

一 除とれ候てハ其家中 此よき 御左衛る者三人とし

負ニ究ゟとも雖然とも討死して後之名をのこし
候へハよろしく城際の軍ハ馳け入と大事とする
処信の前也是用心さへ有ら一合戦と申候と右尉
也て家康の参并ハ見る所の武士大将なりと申候
由案のことしみ方ゟ原にてを先を一手にて勝て
候ても後之参并 可然討死候て大慶之由

一 對陣の時陣場の烟を敵あげれと見て相詰の
きり候へきハ候へも何本と参り候へて杉浦八郎五郎見候て陣や
烟にあふ候そのまゝとしてしひき其方を存候ゟ存ハ敵も
五六十日陣居候ふ所にてある絶ふ陣場の烟あらは是く
煙のさら見ゆへきふ 煙白き事ハ刈取りてる木草に
火をつけるを存候由申候ニ刈取りたんとおし候へと禁

此等ハ陣場まてはなき候由御申候や

一 成瀬吉右衛門尉物語ニ籠城の時大将ハ不行儀之
行事も見え候ハて物語ニ常よ存て武者の動きをしる
よき見へると諸人ニ思をせさうろよき程や参所かくは
要の事ニあるとも存て大将見え候て諸人無心
得と存ゟ存ニ記申候由語り申候

一 日和ニ大将と大事 物頭なども手際合候やうするまね
すの之諸軍勢弱之候ハものゝ下苦人ニ申候由

一 城ニ籠り籠城の時は甲の事ひさし
あるとうちかひて之仰とりき うの由ニ天井なと物語
志賀の城籠り時分籠り候の門を後絶之門にて候
烟まて呼しならす事ともおしられ候ハぬ由小幡新兵衛物語候

此橋をふさぎ候ハヽ陸ニ而ハ悪しく申候
一 其内恐ニ城際ハ御はなれ被成候て後ニ富てハ山
高き所ニ而ハ其外へ由之候由
一 其時敵人ニ御座候て さ川の川ニ至て御帰り被成候
かく候て勝より城ハ内此ニ付すゝミ御陣ハ跡より添
御供之兵城際と宗通りハ又御志ら嶋せ別城際
を通り申し敵とし城よりつき出て相ニ守のまゝ討死致
逃候と見人若しく有へく候付之候まゝハ城ハ競ニ
有ると知りハ今て深き申れとも まてハ此と御志らハ城を
見るハ其際より宗廻りして横より其見人ら御深くなを
御意ニ城ハつる由
一 其時証諸の衆 御本陣や敵人ニ出ハ即はる先手衆て

御敵不仕候ニ付内藤昌豊ら候御家老衆御大 後証寺殿
との御事候へ共 六つ時分ニ郡代を合遣ハ御備徐て候際
御をき御談合ニ城ハ各御同数く出張ハて不動之候へ
御人も相ハ皆々ハ合 話之条と思ひ候つるニ 初人之ハ
其之方御志ら各陣元直しハ味方としてあしく不成り候由
城の方へ向ハ 御手を以て候へハ 其様ニて申や まゝれハ城
取ら切てあるのや 甚人ありハ山より 敵方へ寄る時守
すゝミもやかに極まれて 城中の方役ハ夜討いう之
陣を定らぬらハ 夜討う川ものゝ城より 出てはう
とまてハ敵ハ此団ゑうれて 敵すへ寄り候ても 後れ居を
陣々後より 足取りて 城へは入 極て夜討ち川ものゝえハ
まゝの心得として 本ニ城際ハ陣ハかくる者の

按 孫子曰圍師必闕

あると御免ゆて御志り候

一 城中より橋を色々仕候所あるハ母色々ある殊ゆと候由

すくれとも夜討のらさる城へ近付ハならぬも城日を立

一 城兵色々時色の花を橋ありハん人と付下さと名出候ゆ

まし　夜討城へより川をあらし

一 橋頃橋城御座あ城まは得手あてと一方は御座候て

御免色ゆ汲城あらし

一 関東御合戦の時三州長川左近村越茂助御使として上方大

名衆へきとは　上方大名細川越中〔美根表より〕加藤紀後山内対馬

甲斐守浅野紀伊守堀尾信濃黒田筑前加藤左馬

其外大勢清洲に参集旗を遅しとて長方御かく

三左衛門于時大形福島左衛門大夫相宗〔池田紀〕之た打左衛門人

上方大名二鎮して居候し本多中書井伊兵部両人へ立文

一日代々先達として参り村越茂助名清洲の城之堀

の知と村越茂助ニ参中書兵部ニハ銘として参申

中候へハ茂助申し候ハ上方大名衆長川左近申候先の

様子無之付ては月見御遠有御使ニ参リ候由

ハ大名人中川右翰へ上方大名衆御座仕りて遅れとて

正ん許そはあやふし被申は家康へ茂依の御役ニして

村越参る事に取ては中川仮て縁をされよりて免

仮をは掘色は茂助仮と喚上るを人々わかし是

御役ニ参りよれあしれ御免ゆ三郎へハあやまり

城はとは井中大紀度へ石度へお酒肴あれさ川あさ

美は内にふと居候て茂助申上候へ大名衆

城乃附二の目立合之負て みえこれ付ハ逃かくらは
後えを切つ〻かけて 定室上ハみえうち於候
先負ハ若りきようねとく逃付候ハて 其の〻け又
あらそひを定られハ由 物語ニ有之や

一 川ふしみハ敵とあひきあしハりんと思ふ時ハ足軽は
大事かるへしと すゑくに於ゐせ候らよしとそ有之や

一 敵乃猶志よるふ城附かくらんとあなる後ふ付えてとひき
おさ候よ足軽かけよそ 須後よりも定也と候ひ有之

一 御用ふ附 権現様山中 ニて御通ハ時御家物の衆と
かへハ時御後先方衆候へきハへと 御忠り ふ於立て
居よと 御意なく

一 籠城の時衆かとふ候く後又はころふちるとはくり

と各よし 杏太物語ニ有之や

一 敵陣へ入而陣れらふハ 危急中と指をて 成されまされ
と必 埋めよる物あるへしと 城衆 杏太物語ニ有之や

一 みえる家 御退ハ此時 維波候られ 側ニ 候さるるとの
ひし時 権現様ニ 御先丸の刀とられ 家御話れて 彼は太ニ
候ハ維ハ取り候へしと 長政殿ハ刀にあらしあり かへり
ふ浄ハあるへしと思ふ 遂く気にの 御候でさは
ころぬハるのこ〻刀に御候るの後あらそ候へや 如由也
山本の御物語ニ有之や

一 なくなりて 気する城家城ハ候ことりに候え候へ
ぬらして候り埋え ころふ火なくらけて 飯ふするく

一 城中へ家也時 先く候ある御勝ふ火とかけるるよらん

之時にても　焼は多名になる也

一 段部まきに打掛る人をうけ付し時其人と鐙
にあたまも中にしらて鉄砲を撥ゆり　あるのかれとも
つ射るのちは其のまゝを切るも由語なりや

一 見合もて鐵を欲おろしつき候時大火を持つ縄に火を
一度にするより决定ハ多くをもて語をとり発
命はちの寸ほどを後しとして矢を後にある人互に

成ことし

一 馬上にて鐵に刀をぬけハ火縄をとるもの之ん候五十
めそのかれきらすつるうらよなる法示まてすへし

一 或人羽織の段に浄法れしるに白路を請りしをる
かれ方にぬけ候を短段極に候て逃路也武具は

よかり又に寄の役は候くるもの之

一 馬上にて刀を抜捨てかくとかすれハるけしより時必
うれ多とするあやん候へし

一 欲出てかゝりて退付欲つらは印火縄とて一寸斗に
火縄をりて火をつけてかゝりぬ又はいるさ両の
本れ枝の役ぞよちきこと盛けで欲こくくるとみて
必ちの付かぬるもの之先てんあくれく之

一 欲地へ打入候て味とり候時は大多欲又は夏かしこ
めけ候を続みてさらうおとつけ又はかりきる故之放打の
用心之

一 うる上武者と勝負する時ハうるを切るう射るや可とね
落ちる時とり付けしと語り候也
みよく欲打時ハ遠矢にをしぬるもの也嫌くけ上く可き
へき

よりされハ人ズるもの也

一 大豆と干飯の様にしてうちかひハ入てもり付べし
ろうと喰させ鉄砲の音を去人事也

一 陣鍋ある時茶かどに肩に負しむる鉄砲并陣
まと肩ひげましてもつ由次大事也

一 櫓井にさしかゝりて人の多り集る所ハ必城の鍋にと然べし
武者馬印とおる所は人の知と知るべしとぞ

一 大将之用心する所は敵陣より押て一日の程又ニ里之
敵地へ入ても前かど敵地さうひて様子を見の人数をかく
よき所へ其陣所又は人けなき所用心也

一 軍持る敵ハ旗をさして足軽をかけわしかけ出て旗の
際に居ると勝に一所に居るや厚く備へ静りかへりて

一 旗本ハ大将となる備ゆゑ旗をも動人数なりに
ゆるり静しきは寄せきと心得べし

一 備四方の備相互に鉄砲常にし足軽共様によりて其手ら
自に向ひかへしても足軽其所ハ木かげ二つ三つにかけて
其人数并に其付其兵を能見て引出て弓矢をかけて
能しりてかゝせ又頭ら先念を入静に能其所をしるべし
うるさきハ大将敵前にや常に足軽共に并有せし

一 夜ア事能は常に用心致しいても静として夜の者
をなさそこに有備へで陽の備其所へ立て置くべし

一 出家にていりはに有れ共寄せは寄ると心得たれ
ひろき入口は防しと人数の出入きまれハ刀の柄にそう
めん用心能かハ其心と其外と申事也

郎申候ハ小平次左もゆひしへて走り
出れそれも左様の御役ニ参たらハかり待合居て
見候してとりて参りを申とてものくと申候へハ左も畏
刻御引候之不存左程ものたかりは時節とりけれ千代
御引のとそ申上候へハ権現様親の子に候てハとそ誉
成れ

一　物数寄ニハ御家の者共も茶会ならびに能楽之常ニとも
あたりなる事とぞ承るも後年覚ニなるり身一口と
うけぬふりよろしきとて誉めたる由也

一　物見しる織部にて刀さししまらハ必らず脇差を脱て
置て出へきやと被申けれ

一　ちかきに稲垣平太へ人をこし御前江と申来て被れまそれは

平太申候ニハ物もいはずに涙を流し候かはそのあと
をも許につれて後新下る名残しよ御能しは申候
まり申す附て参る家代源兵衛呼出し千疋遣はす
のとして古ある申様ニ新十ニハ大形能を見付と
形気も分別も我等ニ増しより左様ニそしけれハそのこ
と取れ魚をも許衛つかふに家事家をも請けはとそ候ひ
候申しは申平太存後ニ物語申候堀川にて十六七年
なる名やと候申候

一　山本道牛物語ニするは京にて職人へ被しみて御前門とてそ
申候まで上にて右知の門内能ニあそて稽古にして能うて
とやはへハその鉄砲にて能とおはしへてれさへば左様にも
のきいてなあ門へもいかりは申候申候や

一 権現様御代とて何御中度御法にて人に不諂方より
ましてき慕はせて居るやうなり来るものハ能くま
ろして用とらす也につらはへハ諂方々しけれものに
まけれとて不足して不足ましてあはくふて
後腹やへりて我家にて当人ハ様よななれ共かに又立て
見て其身なるまじきもなや遅れて兄弟不合せ
ぬものゝ諂方れものハ心あしくりて入なるせは何そ
かよう事もなれにかなはんや能くく成て来なるせよと各
御申由

一 此もの人の事を一且すひと思へとも御申にハ祖父ハ祖父
度様ハ手前ハ家内なにに御事なる 親は親度様ハ子は子
度様ハ一とむすひ也 親祖父の此事を御異にかけ

我代ニせぬ御事なるは我かせぬ武篇に洗かんと思ふ
心持つ為とぞし候へと御申候

一 此者ニ人ハ三河の戒あり此者れ御申くれける能く識とハ
たとへむ 親を作成て為と御申ると申やうなる事を
御申候 当世の事の親を恨之 又一つハ俵学れ親を
中かる 仍此人ノ用ではなきぞ 又一つハ何様に存任
まるると多れ果報なきと思ひて此様子存ると教兵

一 或時殿様へ此作よみ時御ン候召候にかい候と此前
にても立まし能て御座ニ居候ても 紙障子ひとへにて御前
ふしろなる いろくより 立しなとに此例なるなれ申し小
入様にて ハおもへと御申候き

一 御作常にまされ 士は義理ニ武篇と申之人に不

茶香なと芳物候し些る所に見れは用にもたらす吾は
義理の武芸作法成身にあてゝ錆は身にくらし嫌ふへし
候中に武人の上にハ甚ものを織と我意と見ゆへし
引かけてよろつ些も有之ふかふにすし其外ハ主人を
些く諫にすへきもの八聞候きとさる些の物そ
後の実の人儀に候る言を人をふくるを些くと候き

一 香道流行ハ古代の時に及ひ甚面とて盗人の得ある
ありし清きくる所にまきれ候とき世上の盗人と
成候まて候る甚内候し思の時節敷なとくハ有の
ものや猶更さらにけむ心得を用心すへきもの之

一 盗人を逃すへきかに候にもらて逃へハ又成るへし名力
其構へも必す首にあらんや逃るへきものたのみ力よ
さて逃るへきものかやと候へき

一 ある所に盗人入候ひては甚内ふ見せ候へハおほく雪
隠れつる足跡を見て足ハ物と成る盗人まて入由
となりて存候ふ中々とし盗人ハ足跡深き陰き
紙雪の上に見て候へとも古説の如くとありハ何候
されとも見て又とく川へ入て何方へ由もなく古説は此
如何にある事ともそう後に其下の物とさふからにて
知るきて又なくぬるかやとも申候き

一 同人申しは盗人用心は薬師と薬地祇しけるとも薬師
は八日地蔵講は廿四日や春なとり七夕とは月も暗し
闇ふはなや梅若夜話久しき四つ迄も在り所は氣
にくいの身ならひ宿來に任せは目をさますそ用心すへきもの之

わきまへの上にてあるまじ　五月比男子なれをと語り合ひ
うせ候事と申せしかど　語りけれバうちふさがれば物と
きせて語られとて出でゝとりして　語りけるにそふかる縄
とくゝりけて置き　晩方　五月比出物語りて　爰へゝく
時分の事　縄とき紀州へ逃げ申し　年寄人衆々へ知らせられまし
に分りき　内々も　御左右ある八月にも良々になり御申しきと
語りけれ

一　四十四五次第に語り申ある人おハらぬまゝて　よきゝるも恐しき
もなう　此時名物語ふある人ハ様子をきゝ御それなけきとも
たやすくとさゝ　さても　まことや　其物ハ　ある所　まきときれ
つる棄のたる　一代見合てゝ　こうゝ　十五六まで浪人
八年は名ハとれぬれまし　唯そゝなとは　いふまでも浮

世話なきハ成らぬ年いも何ならとて　十五六の時分と如何て
候程なるゝ事とせよとをし時わろき　旅十五六と心得申しへ
きゝすいうゝん　我いひとをほうへも　そのゝまゝなし　従時そ
も見合するにも人ねなる　ねるまなしハ　きゝんと思ひ人の
いろね不ならいいうひとうむひ唯一筋に見合なし
よろしき　我もさてめでゝていきいしハまれ
成らしハまてこなひても其物になる　銭を以てまてこ
なひを人ゝしるをきゝずなをなさしとも人でん中て
くまやうきや　様大我ふあら所てみるゝ此頁と思ふは
皆人合わる家来る　気利やまずさせば　よし仕てなる
は甚ふとぶん　ふんまて　唯一筋にせよ　まてとなひて　死ね
る人がまゝる　ふぬぬかふそしる人ハ　此ゆへとそ候也へ申さ

一 刀ハ中とふ志ろうの銘をし 権現様より御拝領也 吉川
よしきろうしこのや 又 夜るてひろうせよとき由 名乗し
一 夫のひの時ハ やき 不へあらぬものに 夜をくろくして
みゆるや 富不よく 候由
一 かまうきしかまりの此時 権現様不ゆしく候ぬ 寝ま不
よ存候へも よし 安ゆる由 其之寝不と 物別也 姫ものハ
いやかりて ふうき不へ あがりふられ ことのこ
一 信長様御夜 御父子一所ニ御座候而 一度ニ御滅候也 本能寺
様とて 一所ニハ有ふぬものに 親子様とて 帰ふ由出馬
有之よし
一 江戸にて 西丸ニ権現様御座候所 右座被様御入也ニ御座
候所 右地震ニて 御座候所 権現様 御前ニ御文と

若君の時一所にて 其のもの由 記しとし 右座被様 遠州
有之候
一 権現様御代の御合戦之覚
大高兵粮入 御年十七
かりや十八町畷
うきかい 酒井将監
一宮後詰 御先石川伯耆
吉良東条 御先石川日向
松平城攻
下地之御油
ほり川
牛田福嶋 英之家 英志賀
石ケ瀬 御先 酒井将監
梅ヶ坪 将監
ころも広瀬 将監 二段
一揆 御年廿一
吉田 伯耆 二段 本地御油
かけ川 日向
姉川 酒井左衛門尉 御旗先大須賀五郎左衛門
みかた原 御先大須賀五郎左衛門
家山なし合戦

役にたゝさる由を仰けるとや

一 大坂の定番に阿部備中守来る所の塀垣櫓使を仰付て
時石原惣左衛門に大手の門は阿部備中守 京橋口付らる
玉造口は稲垣摂津守 揃して 櫓組を仰付て 城代なるし
八人得て御座るや 其今城は本丸にかわる城も 力責にて
理には とし生めるの 主へ大坂なとは丈夫に所為
取付て大坂によれは かくよしかをかけて 大橋の所々に鉄炮
多二万余ても出く 攻かよ あるよしくは 所々本丸を
面裏二口を道は 西東共に高石 千人分 其外内の
土手てしけへだししは 取出 帰り破れても本丸も
かりそも万日と二万日も 持ちて 揃子の和心なる
ものよと矢狭間を一人あて二人あてと人賦有之なる

ちとりは諸向城には大勢籠りたる 雑人ともおほく出来てあし
きものにて所々門をよくかためて 置かるゝなれはよしよし 一大
事は籠城に三つあり ちからをやくと云いかんと申へなり
出門ちやもやくは城中の者に縁者 親類 又は近付に
つけて金銀をつかひ 褒美を得おとつかもしからんと
いやまなと いひて引入ける 又なとかんと いふは城中
の者 誰彼は中よく中あしきなとゝ いひて うちをまて
いひさまさけ互に心をしてあし 気ましして彼ゆへなる
あり 又引入れは 敵をよふるよしより 城中と門しさかり
てよもしと あひしらひ計略となすすと おもふもんもん
とて一人かゝへは我かたらしと 出ていでや 其人数
引よりかよひ付入に城へ入けるへし 此三つを能く心得へし

浮田由常ゝ権現様御先ニてハまゝるらしくんぬらく
城ヲは城と私ゝまゝ御大事御わたし申さしきらも
一向誉めつりやと存候得とは各其御申候らし
おう〻申出たやとおほしめし也

一 手はいでふ物語ふ浮田秀家殿蒲生城外不須ゟ城甲斐
府の小笠原殿なく〻と蒲生城より御追放〻それニと候
云事ニ而仁右衛門又ハ草木ふとと居城のやまたゆ〻ら岩
〻須あしくと通り城外衆又は後北山ふかく路を
過て取く居城通て〻ゆ〻時城中よりおめかく御追放
それんとやしと小笠原殿ニ対し申上候かく〻きニと存て
打城をあけ持〻〻御時節後より時節をあけ攻入ル
其上時ふ城と私〻由兼ね念丹後物語也

一 権現様駿河より御出城ヲ御取りニ付光有 松平周防守也
城主各せり合ひてはさとよもしくと引寄人数一人も
ゆる御用と御下知ゆへて〻〻〻居しておるおとふ城府おれ
時ゆもし則射入ゆ取籠り由 鉄炮を居おゝ物語也

一 籠城は時矢文入候へハ城中我人疑ひ申ゆり持口矢
文〻〻とりいひて城内より見えゆれゆゆ計略ふもあて
より八矢文ふと射つくし物語也

一 城中雪隠作様ゆえ〻〻つけても 刀さしてもそれ
〻〻〻ゆやうふひろく 〻尺升つふ作りゆ由也

一 内不浄流しのまて〻〻掃ふ堀ゆゆゆ 又ハ川なと丸
此内へ それこえて度〻雪隠を捨ゆへは後ハ何とも捨
不ふし迷惑〻由申ル

一 小荷駄まてとて兵粮雑事の為につく跡の備とさしたるも
者あり陣兵粮殺度々物影をみ手、合戦役のため
其外様子あるも面々なりとも成かりにて其あ
仕様に候や 左様ハ 敵味方威勢仕相を又物頭にても
とりしろなきとんをえむけにて志しきる事く 深も勘弁
動静なしと存ん事同意やと思ふ者喧嘩のことく成るべき事
動静するなかにも色違く よめおさきもおやも各事也や
指ある人をは何方にても不と見合も差別にても何るへ
あらハうしてかりしくと不知んをハへハあたやさき由 左様
物語ハ
一 人間は死地に入る時一つや指ある生死死地とて二つあり
生地はいきんと思ふ 死地は死なきとしるもるや 腹を切の

又ハ大形の者 完後に番れハ何きをとるゝなれ 死地に入なし
もひきる成や 昔より十死一生の合戦ハ仕よく必勝あるへし
十死一生の合戦は人数立武略あるけとは少勢なる由之 窮
鼠却而猫をかむといふに同し 名大将は我者ばかりにあらす
軍兵をすゝめハましめて死地に入しむる事 古後はなくらき
手なとあるへし 常にもあるへきや あらねなるへとなし
め兵面させ候も同意也
一 ちかしきる城なと寄なんとする 又ハ戦に合戦を致さん
思ひし敵の合する時にとかんぐ 敵手又手や味方は
能く志てめしして敵合させるやうにかなへし 卯の上刻
申の上刻 或の刻をとせは時なるや
一 物おそ甲の指様鑓にかゝりてとるまし 手入よきやうに

一 筑城は二ノ丸と二重塀に中にて小石まじりは土塀
土居は下に穴を掘り石の一人おおとろくと身か
くしとすべし 目は時ハ此石まはりん よく穴の
中にて是を見るべし 塀から外のけて竹束を横に厚く
置て上を武者是にふして せめ附る時へよりて石
にても すべし 灰にても まくべし 表塀破れても内は
竹束にて かこふに すべし

一 塀の上に幕を張り矢切とするもあり 此時ハ塀に床
をかき其上を武者是をふみするや

一 右城の外かねて堀底へ塀より縄を張りて垂下
ノ縄に又別に縄に車を付け 唯城木を結付てあげ
おろしとして 夜は内にさいし 堀底を見るべし

一 夜廻り昼夜ともに同前なり

一 城攻の時は敵も仕寄の竹束を付よする也 仕寄穴を掘りて
も行なり 家なし 穴掘様 横矢なき様になすべし

一 竹木付よりて杭をうちそれにりんをかけ入違ひとして人
数入する様に口をするや 竹束の多き所に二重かさね立
かけて矢狭間をきるべし

一 竹束初と又後仕寄し竹束は人数は多少によりて
三間と十間ほどもするや

一 竹束はまるくかこふくと持ち様に土俵ゆひ 又立ても
継常はまるく重ねてならべし 持ち 又材木ならべて
仕寄也

一 うち鉄炮をかけ狭間一ツに何寸と鉄炮の多少によるべし

一 塀の上日々上へ人あらはるゝ所しあらん
塀にあり狭間横矢ばかりともするもの也 かき中に房口とて
曲りたるをもとする作りし 横矢左右は敵を後に
する故に塀は射る後を見ず来りて 頭に当りね
なかり 左右の虎口なれば 敵とても見て 折つ
射つけるなり心あしくもうらく のく
一 くゞりの敵ともう余 合ひ候時 後ひろく作れ城
より出る人も見来り 後をこもり見ひてもうらぬ記
にくき内なれば見わろきやうふるまひに 左右あらて 候也
持ちに候へし
一 石ふみの事 山城山用にや 左右の腹に大木を横へて
持ち縄本は大小によりて 三石も 五石も 塀の中へ納 て

左右の木は半まよき所に石を多く のせ置し 敵塀に付て
登らんとする時 持ち縄を一度に 切落す 木と石と一度
に落すなれば 人多く死也
一 人多く殺す事 城攻て 人数つめ寄 定らむとおもふ所に
城より積置 十間 或は二三十間
うらへ廻し まげ合集て 先つゞく所かねんと思ふ所に
二石も三石にも 一二尺深さ 四五人入り小穴をほり 鉄
炮[illegible]多く数しして 其上小材木作りなどにて
簀[illegible]にして 其上に土をかけて 隠し
穴の[illegible]穴へ城中より 弁を ぬきて
其外 一二尺に[illegible] 大縄に鉄炮[illegible]薬を塗て 左右
穴へ通し[illegible] 城中より 火を付くへし

其火太刀の穴の茶にさへ付て焼上け　古今能之人数
ことごとく足の下より焼あぐる故に多く死するなり

一 塀の小屋窓やとて塗屋にするもの也

一 塀の際竹束つき塀を竹束の腰までに堀をほり手中に
みて塀の土台の下をほりてそれより鉄炮うつものなりと
狭間をとひらき夜より狭間をふさいで鉄炮打の様に
致しけるもの也竹束の後に土俵をつきあげて武者走とする
塀を突崩さるる事と土俵の武者走へあがること
なるへし此時心得てよき也

一 塀の上に幕を張り幕は矢鉄炮通りても其時ハ塀の内
土居又は土俵又ハ塀のひかへに夜をかさぬ武者走として
物見之足ひのよきなる續松又は松明肝要之

一 塀ハ一丈ほどよき也　覆ハ芝をぬりにするもの之

一 城攻時も又軍の懸合の時もこれあるの事ハ誰もするものと
おもひて第一の事にて名をあげなるへき事けいもうある
とむる後にある家来なるものの役附を見てよき首
取るとしかのるるもいひけれとも後にある家来なるものの城
攻る時も首取んとて一番に乗入へしと思ふべし　何様なる首
も宜しく候へは一番に乗る味方代々いなんに
なりのこと候なり

一 侍は常の心をおもひて用心すべきは要動揺せぬやうに
とすへきハ地震雷にも動揺するものこれと聞て知るべき
常にんけゃハぬけかあなるべきなり

一 具足よく見る様に具足は見て様に箇のこともになけ

そてそのまゝ見えて小まくして皆よみてさしかく
付小ゟ頭の上へあげてまとさし入候也 上帯して刀指
て後小刀をぬくることよし也

一 みゝうちなき様のゆる刀は紺小紙を広さ三寸ゟ
三寸に切て二ツ巻にするとも三ツ巻にするも巻ゟ下へ文
字でとあらは肩ひらかゝに付るも又結へあひてとむ一
鎗もさしなれても日えは様小一長面一甲前え面一
鉄炮たりも二ツ巻ゟ三ツ巻に隊田ゟ背一統より鉄炮
て禁制すへしみるみはそれをせめものするはさしつかえ 歩

一 性をかくもつといふものは一かくも丸くも修へまとふになき
やうにされ候道具一統に居ておしするやうにて
のうつれ隊に居てゐるとは遥かなる是又一統に立て

まとひかけのなきやうと継き候といふとなり候也

一 大閤の事に候ゑと権現様と御見にまかりて名のある入の附
事に候故大将なくして 権現様の御盛衆へ群集して
此御盛衆ハ悉しく諸ふ忠節之とりし大隊の一向門徒
御歴々と六隊へ御部ゟきは彼さなりしは大津の軍相成候
みるや 大津の城へ御はなて飛しゆえなりし候へハ本門両
門徒ハ其神之されをもつて勝て帰しくハなし 夏て未
代のおぼえ為の名相也覚悟ふ及ます 又大津の城へ入
候て十人の時其為とまりのきゝ候へハちゃや 茶人ともある
ものく事候ふ御合点かやしのるけはなくゝはあるまし
きとて御動揺ありし御在候へハ事に候ゆえ御威勢とみえて
まかし彼是候之となり候也

かたきをねらふに大勢にてはかなひかたく又は
付入に城をとらんとする事は頃日も書す此寄合
やみうちも敵の井楼やられ油断のをもよりすあらうと
力に付入にせよる武者もなく成とおもへしかりひき
一 日時夜討の先に沢られて立花細川ものゝ夜討ちち
いらんとおもひかましきとて不討と沢き其時惣人
数顕頁と見へて或人立花細川度より節縦夜
討い　鉄炮と云付毎夜用心致之候夜討
おいてぬと柄沢へ八井伊掃部頭され八武道の人を達に
柄は古今城責致すされ候とて城中の目を
とひきおすやうに用心と致し夜前より加へて夜討
おては其むかしも付入を致さんと思ふうけ候とて夜討

にと云事も初は様子致すさえも申さるに夜討られ
ぬ様子なれは其ゆへ八ろりの用心致とおもしへきおもく
なと申れつる
一 日夜討死人は腹を付て食するを致し候と穿鑿
候へハ胡麻大角豆なとくらひ候と見えて彼ハ喰候物
なしと見て城中ニ粮沢ありハらんしとあり節織
候へて武者不食致用勿論しきとてもかくし取也
一 上使元大名有衆一所に集り先をとんとせられ候は後とて
狂えて下知致されなす天下の礼か候也 上意被捉ハ
しらひ戦死と思ひても必ず顧て此身と先をさつ事
ゆへなく其身を此度ハ君命をうけ又そられと忘也
親しきをたゝしめ家々常の上意と承られ

候やと人にまで御沙汰候法律役ニ首尾相違之
宗門ありいつもりなくさやうにあらんに候は此武家の
時めけりけせんとなる武略といふは是也謀計をもいふ
君命をうけすといふハ騎兵のなすわね大事の存候也
必君命をうけさるによりてひくさるにあるに出る去り
いましめたる事急務にしてきかせは其様
あそこなくは存候ニ諺をゆへあらん也 宣命と陪
もろ日之川のんは大将にあるといふは 宣命と語り
多と言葉を以て妻子と言葉職よ向ひて命と
忘るといふはるつ定めしる法也々家の大将之出来る
故其後来るまでよし 批判致候也

一 法令田沼所存の時ふるまさだき のちあふにくるよし

の趣を集め書立させられ書付て次の末代
と調室にて見られ候へ共 御気色よろしく候とも
公儀院様 御聴ニ申上候て 合戦の念ニ其趣をも
あるさせまいらせ書物ニ合せいだし候て 闘とならん
あるまいとなりて 御思召ゆゑしえかく候あるまい
候でさは如何にて 思案に及ばず 理非は見定めに
あるにあらずて ものともよき 無論人に及ぶ

一 大坂御陣の時先手へ御役高見ましく時 権現様御付
候やしまは先手へ参りて 三河の人衆あらし
人数にて なんとかくは 一先手いさゝ申候ニ 御役ガ
つき申候ニ三城中をとんあるまじく申候た あるらん 此三ッ餘
人数申て申上候由

御先祖御三代目信光様ゟ御代ニ御奉公當御代
家光様ゟ九代也

八郎右衛門
信光様江御奉公

次郎右衛門
此時長親様之御代紀伊国ヨリ武者修行ニ甲大久保ト申ス者罷下ル長親様名字御所望ニテ七郎右衛門

七郎右衛門
名乗可申由
御意ニテ為大久保也

五郎右衛門 若名新八 法名浄源

平右衛門 若名甚四郎

安ア四郎五相流 左衛門四郎

五郎右衛門

五郎兵衛

甚三郎

七郎右衛門

次右衛門

權右衛門

甚右衛門

五郎右衛門

新八郎

新八郎

相模守 忠隣

玄蕃

半右衛門

加賀守

加賀守

彦左衛門

平助 彦大衛門トナル

勘七

新藏

大八郎 大河内之家繼善兵衛ニ成ル

石川主殿

同 彈正

大久保右京

同 宗三郎

大久保主膳

同 宗四郎

大久保主計

大久保清九衛門 早世

堀尾帯刀　吉晴立身次第

一近江國長濱ニテ三百石

一丹波黒江　三千五百石

一若州坂本　弐万石

天正十九年ニ入
一遠江濵松　拾二万石入十二年

慶長五年ニ入
一出雲國　隠岐國　両國　忠氏江渡ル　子息出雲守ノ也　家康公ヨリ拝領ス

天正五年
一播磨　姫路　秀吉播ニ国　御拝領霜月十八日　御入国　千五百石

一若狭高濱　一万七千石

天正十三年ニ入
一近江佐和山　四万石　入出六年

慶長四年ニ入
一越前府中　五万石　家康公ヨリ拝ス